

## 『小野川』

「こんにちは。隠居さん、いますか？」

「おお、誰かと思ったら八つつあんじゃないか。まあまあお上がり」

「隠居さん、聞きましたよ。どうして言ってくれなかったんですか？」

「なんだい、藪から棒に。あたしがお前さんに何を言わなかったってんだ」

「また、すらっとぼけて。おいしい話があったんでしょ。ひどいじゃねえですか。あっしに言ってくれないのは」

「なんだよ。少し落ち着きなよ。どうしたってんだ」

「どうしたじゃありませんよ。隠居さんが、なにがなにしてくだだったってタツ公に聞いたんですよ。一体どのようになにしたんですか？」

「なんだか分からないな。もう少しあたしにも分かるように言っておくれ。お前さんはいつもそうじゃないか。大概ここに来る時はあたしに何かを聞きたい時なんだろうが、それがなんのことか分かるのに大変に時間がかかるんだよ」

「いや、そりゃそうですよ。あっしは頭で考える前にこうして喋ってるんだから。どうなにをしてどうなったんですか？」

「それで伝わるわけないだろう。なんかあたしがしたってのかい？」

「したじゃありませんか。ここんとしばらくの間、留守にしてたでしょ。あっしは話し相手がいなくて困ってたんですから」

「そりゃ悪かったな。少し遠方まで足を運んでいたんだ」

「隠居さんがうちにいないでどうするんですか。隠居ってのは死ぬまで家にいて動かない人のことを言うんでしょ？」

「そんなわきゃないだろう。なんで死ぬまでここから動かないんだよ。あたしだってそりゃ出かけることもあるさ」

「どこ行ってたんです？」

「小野川温泉だよ」

「それだよ」

「なに？」

「それぞれ。タツ公に聞いたんですよ。隠居さんが偉そうに温泉巡りしてたって」

「なんだ偉そうになってのは。そりゃあたしだって温泉ぐらい行くさ。それがなんだってんだ」

「ずるいじゃありませんか。あっしだって行きたかったですよ。斧川温泉」

「少し発音が違うな。斧川温泉だと、斧が流れる川になってしまうよ」

「怖いですねえ。川に斧が流れてきて、あなたが落としたのはこの金の斧ですか、銀の斧ですかって聞かれたんですか？」

「何を言ってるんだ。だから斧川じゃないんだよ。小野川だ」

「ああ、小野川ですか。とにかくずるいですよ、一人で行っちゃうなんて」

「お前さん、温泉が好きだったのかい？」

「当たり前じゃありませんか。温泉が嫌いな奴なんて、この世に一人もいませんよ」

「そんなことはないだろう。温泉には関心がないって人だっているはずだよ。じゃあ今度からちゃんと行く時には声をかけるようにするよ。それでいいかい？」

「いやいや、それじゃちょっとこっちはおさまりませんね」

「じゃあどうしたらいいんだ」

「聞かせてくださいよ。どうだったのか」

「どうだった？ そりゃとっても良かったさ。いいお湯だったよ」

「おいしかったですか？」

「飲んじゃいないよ。良いお湯だったさ。身体も心も安らいだような気持ちになったな」

「いいですねえ。安らぐなんてえのは。近ごろとんと安らいでませんよ。おすそ分けしてもらいてえなあ。いくらか持って帰って来ました？」

「温泉を？ さすがに温泉を持って帰ることはできなかつたな。まあただ小野川温泉の逸話で良ければ聞かせてやるよ」

「逸話？ へえ。逸話があるんですか？」

「小野川温泉がなぜ小野川温泉と言うか、知ってるか？」

「そりゃやっぱり斧が流れる川があって」

「違うよ。名前の由来は小野小町さ」

「小野小町？ なんか聞いたことありますね。なんでしたっけ？」

「六歌仙の一人としても有名な歌人だな。貴族の娘として生まれ、宮中に仕えていたのだが、出羽の国で郡司をしている父親に会いに行くために都を離れ、そこに向かったんだよ」

「はあ。なんだか長くなりそうですね。ちょっと話が終わったら教えてください」

「聞く気がないのか。まあ面白い逸話だから少し聞きなよ。そして旅の途中、米沢郷に辿り着いた頃だ。小町は旅の疲れからか、病にかかってしまう」

「あら可哀想に。お父さんを探してたら病気になっちゃったんですか？」

「そうなんだ。昔の話だからな。ずいぶん長い旅をしていたから。そしてある時、夢枕に薬師如来が立ち温泉の場所を伝えたってんだ」

「夢枕？ 夢の中で如来が出てきたの？ そんなもんが現れたらびっくりしますね」

「そんなもんって言い草はないだろう。その導きに従って進んで行くと、本当に言われたところに湯が湧き出ており、小町はその湯に浸かることで病を治したというんだ」

「ほお。そんな凄い湯があるんですか」

「そして旅の疲れを癒し病を治した小町は、再び父を探しに北へと向かい無事に会うことができた、そう言われているんだ」

「そうなんですね。病を治しちゃうってのはすごいな」

「そうだろ？ 小野川温泉の名前の由来は小野小町だと、こういうことだ」

「なるほど。じゃあ、あっしが温泉を見つけてたら、八五郎温泉になりますね」

「なんでお前さんが出て来るんだよ。何にも効かなそうだな、八五郎温泉なんて。でな、この温泉を探している時の話がまた面白くてね。薬師如来に言われた通りのところを探していたんだが、途中で葦の葉が生い茂るところがあつてな、どう進んだらいいか分からなくなったんだよ。ところが袖に葦の葉が触れた時に、片方の葉だけが次々と落ちたんだ。ああこれは行き先を示してくれたに違いないと、残った葉の方を進んでいくと無事に辿り着けたんだ」

「そんなことありますか？ 葉っぱが行き先を示してくれるなんて」

「まあどこまで本当の話かは分からないがな。あとまあ、途中で小町が川を覗いた時に、絶世の美女と言われた顔が病から鬼の顔のようになっており、その川を今も鬼の面の川と書いて鬼面川と呼んだりなんかするんだよ」

「いろんな話が残ってるんですねえ」

「それだけ小野小町というのは伝説になる人物だったと、こういうことさ。その熱い湯に浸かって、あたしは帰って来たわけだ」

「なるほど。じゃあ帰ります」

「え？ もう帰っちゃうのかい？」

「ええ。いやね、今の話を聞いて思うところがありましたんで。温泉が病を治してくれるんでしょ？ ちょっと行って来ます」

「行くってどこに行くんだい。あ、おい。八つつあん！ 忙しい男だな、まったく」

「いやあ、良い話を聞いちゃったねえ。病をたちどころに治してくれる温泉なんてのはいいねえ。あ、ここだ。おう！ 善吉はいるかい！ あれ、返事がねえなあ。やっぱりそうか。開けるぞ、善吉！（戸を開ける）お、いたよ。おいおい、善吉」

「へ？ なんだい、八つつあんじゃないか。見舞いに来てくれたのかい？」

「そうだよ。どうでえ具合の方は？ やっぱり悪いのかい？」

「ああ、なんだかずっと調子が悪くてね。起き上がれないんだよ」

「そうか。そりゃ心配だなあ。でもな、そんなお前に良い話を持って来たんだよ」

「良い話？ どんな話だい？」

「お前の病が良くなる話だよ」

「え？ 本当かい？」

「そうなんだよ。今ちょうど隠居んところ行ってな、病が良くなる方法を聞いて来たんだ」

「そ、そんなことが出来るのかい？」

「おう。だからお前のその病も治してやろうと思って」

「ど、どうしたらいいんだい？」

「温泉を掘るんだよ」

「へ？ 温泉を掘る？」

「そうだ。まあちょいと聞きな。お前よ、小野川温泉ってのを知ってるか？」

「いや、あたしは知らないけど」

「そうか。これはな、斧の小町が名前の由来と言われてるんだよ」

「斧の小町？ ずいぶん物騒な名前の人がいるんだね。それを言うなら小野小町じゃないかい」

「ああ、そうだった。その小町ね。六千歌仙の一人としても有名だ」

「六千？ そりゃ多過ぎるよ。六歌仙じゃないかい？」

「ああ、そうだった。その小町がな。山賊の娘として生まれたんだけど、九州で働いてた時に父親を探そうじゃねえかってんで、出っ歯の国に向かったんだ」

「めちゃくちゃだよ。なんで小野小町が山賊の娘なんだよ。九州じゃなくて宮中じゃないかい。あと出っ歯の国ってなんだい？ その人はみんな出っ歯なのかい？」

「え？ 違う？ まあとにかくよ、親父を探しに旅に出たんだ。で、その旅の途中で『ああ、疲れた』ってんで、病気になっちゃったんだ」

「なんだか軽いね。小町が病気になったのかい？」

「そうなんだよ。でな、病に伏せてるところに薬師如来がやって来て、『おう、お前に温泉の出どころを教えてやろうか！』てんで、教えてくれんだよ」

「どういうことだい。薬師如来が歩いて訪ねて来たのかい？」

「そうなんだよ。で、じゃあそこ行ってみようじゃねえかってんで、行ったら温泉が出てて、その温泉に浸かったら病がたちどころに治ったってんだ」

「なんだかよく分からなかったけど、そういう逸話があるんだね？」

「そうそう。逸話逸話。でな、温泉に向かう途中で道に迷ったりなんかもしたんだよ。足がたくさん生えてるところがあつてな。どう進んでいいか分からなくなっちゃったんだ」

「足が生えている？ そんなところがこの世にあるのかい？」

「あるんだよ。地べたから、たくさんの足がこうやって生えてんだな」

「気持ちが悪いね」

「でな、右足と左足があつて袖が触れたら、左足だけ倒れたんだな。で、倒れてない右足の方を辿っていくと、温泉まで着いたんだよ」

「…たぶん葦の葉っぱのことだろうね」

「あとな、途中、小町が川を覗くんだよ。すると、そこに鬼がいたんだ」

「鬼がいた？」

「川の中に鬼がいて泳いでたんだな。『なんだ、こりゃ。鬼がいるじゃねえか！』ってなって、犬と雉を連れて退治したんだよ」

「桃太郎？ 小野小町は桃太郎だったのかい？」

「まあ逸話だからな、どこまで本当の話かは分からねえ」

「全部違う気がするけど。え、それで八つつあん、あたしに何が言いたかったんだい？」

「だからよ。お前の病を治すのは温泉が一番いいってことだよ。今から一緒に温泉に浸かりに行こうじゃねえか」

「ちょ、ちょいと待ってくれ。八つつあん。それは無理だよ」

「なにが無理なんだい。温泉に行くぐれえできるだろうよ。熱い湯に浸かって病を治すんだ」

「あたしの病は、恋煩いだよ」

「へ？ 恋患い？」

「そうだよ。思う人がいるんだが、その想いが募って食事も喉を通らなくなっちゃって。それで寝込んでるんだ。みんなからそれは恋患いだって言われたんだ」

「あ、そうなの？ 恋患い？ まあでも恋患いも温泉で治るんじゃねえか？」

「治りゃしないよ。どうして温泉で恋患いが治るんだい」

「熱い湯に浸かったら、恋患いも治るんじゃねえか？」

「治らないよ。あべこべだよ」

「あべこべ？ どういうことだい？」

「この熱い気持ちがますます熱くなっちゃう」

おわり